

機関番号：33905

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520172

研究課題名(和文) 江戸時代中期における上方歌人の総合的調査・研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Kamigata Poets in Mid-Edo Period

研究代表者

神作 研一 (KANSAKU KENICHI)

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：30267893

研究成果の概要(和文)：4年間に亘った本研究の柱は二つ、一つは江戸中期歌書刊行年表の編纂であり、もう一つは小沢蘆庵・梅井一室ほか当期主要歌人の基礎的研究であった。前者についてはほぼ計画した通りの書誌データを集積し、成果の一部を「歌書の変遷」(「調査研究報告」30号、国文学研究資料館、2010年3月)等の論文にまとめた。また後者については、新日吉神宮蘆庵文庫所蔵の全資料を目録化し、解題と翻印を収めた(日本書誌学大系『蘆庵文庫目録と資料』蘆庵文庫研究会編、青裳堂書店、2009年10月)。

研究成果の概要(英文)：This study is composed of two chapters, one is a compilation of a time line of Kasho publication in Mid-Edo, the other is a basic research for OZAWA Roan and TOGANOI Isshitsu etc. I summarized in one paper, A study of transition of Kasho. And we made a catalogue of Roan collection of old books.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学

1. 研究開始当初の背景

近年の近世和歌研究は、後水尾院・霊元院歌壇など主として前期の堂上歌壇研究が飛躍的に進められてきたが、それに続く中期(享保-寛政期)は、依然として賀茂真淵や本居宣長らの国学系に片寄ったものだった。だが特に上方において優勢だったのは、国学系歌人よりも堂上系の地下歌人たち(地下二条派)であり、彼ら上方地下歌人の動向を整理することで、堂上(前期)から地下(後期)へと力強く展開していった近世和歌史の新たな記述を模索したいと考えた。

具体的な指針としては、時代に君臨した冷泉為村の様子を余すところなく丁寧に描出した久保田啓一の『近世冷泉派歌壇の研究』(翰林書房、2003)を同時代堂上研究の要とし、他方、堂上地下双方をバランス良く見渡した上野洋三『元禄和歌史の基礎構築』(岩波書店、2003)をしるべに据えた。上方地下和歌史の追究は、これまで国学系一辺倒だった研究史の空白を埋めるとともに、いわゆる国学そのものを相対化しうる沃野でもあると睨んでいる。

2. 研究の目的

研究の期間を4年と設定し、江戸時代中期における上方歌人を総合的に調査・研究するための柱として、主に次の二点を掲げた。ついでには以下、その項目ごとに簡潔に記述する。

なお「中期」とは専ら18世紀、享保-寛政期（1716-1801）を指すものとする。

(1) 近世中期歌書刊行年表の編纂

当期の全体像を大づかみするために、いわゆる歌書（物語・日記紀行・随筆・詩書・絵本などを適宜含んだもの。抛りどころは、江戸時代に刊行された「書籍目録」の分類）の刊行年表を組織する。どんな本が、いつ、どこで出版され、今現在どこにどのくらい所蔵されているのか。これを端的に見渡したものは未だ備わっていないが、和歌の享受や地域性の問題、あるいは古典の一般的浸透を推測する手がかりとして、歌書の刊行年表はこの上ない指標となるものだ。出版の時代の和歌史を探って、知識の開放とその充実の度合いを把握し、当期の歌学の具体的なあり方や達成を見極めたい。

(2) 小沢蘆庵・梅井一室ら主要歌人の基礎的研究

当期を代表する地下歌人は多数存在しているが、高名なわりには研究が遅れている小沢蘆庵（冷泉為村門）、テニハ論者としてのみ名高い梅井一室（日野資枝門）、さらには同じ資枝門で伝記のよくわからない石塚寂翁、歌の家香川家の第三代香川景平らについての基礎的研究を進めて、当代における和歌のありようを歴史的に叙述することを心がけたい。資料整備や家集の発掘分析などをまず心がけるが、この際、留意すべきは、各々の和歌活動を同時代の流れの中で見定めることである。各歌人の特色を丁寧に見極めて、当期の和歌史を、より多面的に叙述する緒としたい。

なお、蘆庵研究の根幹をなす新日吉神宮蘆庵文庫（京都市東山区）については、所蔵資料すべて（全1600点余）の目録化をめざすとともに、重要資料の翻印を果たしたいと念じている。

3. 研究の方法

目的達成のための具体的な方法は以下の通りで、(1)と(2)を適宜バランスをとりながら進める。

(1) 近世中期歌書刊行年表の編纂

宮内庁書陵部など質量ともに歌書の刊本の蔵儲に富んだ諸機関や、西尾市岩瀬文庫・神宮文庫など東海地区の諸文庫において、関係文献の書誌調査・データ収集を行う。採取

したデータに基づいて、年次順の仮年表を作成する。

さらに、全国の文献の収集を積み重ねてきた人間文化研究機構 国文学研究資料館に所蔵されるマイクロフィルムもしくは紙焼写真本を閲覧調査することで、上記の作業を補完させたい。

刊本ながら伝本稀少のものについては、鋭意情報を収集し、個人蔵資料の調査検討を開始する。

(2) 小沢蘆庵・梅井一室ら主要歌人の基礎的研究

対象とする歌人について、先行文献の洗い出しを行って研究史をおさらいするとともに、自筆本・写本・刊本など関係文献の調査・収集を実施し（墓碑調査も含む）、歌人研究の礎としたい。その際、交遊関係も重視して、可能な限り歌壇史の中での位置を見定めるよう留意する。

新日吉神宮蘆庵文庫については、宮司および新日吉神宮藤島嘉子氏の許可を得て、目録編纂のための書誌調査を断続的に実施する。刊行に向けて、版元（青裳堂書店）との連絡調整も密に取ることとしたい。

4. 研究成果

4年間に亘った本研究の柱は二つ、一つは近世中期歌書刊行年表の編纂であり、もう一つは小沢蘆庵・梅井一室ほか当期主要歌人の基礎的研究であった。

前者については、おおむね計画した通りの書誌データを集積できたので、その成果の一部を4本の研究論文として公表した。「歌書の変遷」（「調査研究報告」30号、人間文化研究機構 国文学研究資料館調査収集事業部、2010年3月）、「江戸の王朝美—歌仙絵入刊本の展開—」（人間文化研究機構 国文学研究資料館特別展示図録『江戸の歌仙絵』所収、2009年12月）、「『続和哥極秘伝抄』刊記」（「東海近世」17号、東海近世文学会、2008年3月）、「『浄土宗長歌註』刊記」（「東海近世」18号、東海近世文学会、2009年5月）がそれである。

もちろん、未見の資料も相応に残されているし、既見であっても原刊初印本ではないものも含まれているはずだから、調査は今後も粘り強く継続されなければならないが、ひとまずこの4年間でその礎を築くことができた。

ともあれ、非常に地道な作業ではあるが、データは相応に蓄積されてきたので、今後は、近世前期・近世後期とのデータの接続をにらみつつ、近世期を通じての歌書刊行年表の編纂と公開に向けて、いっそうの努力を傾けたいと思う。

後者については、まず日野資枝門の石塚寂翁について、新出の家集『石塚寂翁家集』(大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵)を紹介した「石塚寂翁の家集について」(『上方文藝研究』6号、2009年6月)なる研究論文を公表、従来、大半が不分明だった伝記に関しても多くを明らかにし得た。

同じ資枝門のテニハ論者梅井一室についても、新出の家集『梅井一室家集』(名古屋市蓬左文庫蔵雑賀重良文庫)を紹介して、地下二条派歌人としての足跡を近世和歌史に定位した(「上方地下の系譜—梅井一室について」『国語と国文学』88巻5号、2011年5月)。併せて、未紹介の貴重な歌論書『聞書』(大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵)の翻印も果たした(『聞書』—梅井一室述・記者未詳—『金城日本語日本文化』87号、2011年3月)。一室のような、「平均的な」歌人の掘り起こしと分析は本研究のもっとも重視するところであり、今後さらにこれを積み重ねてゆくことが、時代に即した新しい和歌史の叙述につながるのだと考えている。

また、『切紙二十五箇条』(刈谷市中央図書館村上文庫蔵)所掲の、宝暦九年(1759)の香川宣阿二十五回忌追善和歌を分析して、元禄期から続く「歌の家」である京都梅月堂香川家の門流研究を行った(「梅月堂門のゆくえ」『金城日本語日本文化』84号、2008年3月)。追善歌会を開いた香川景平の初めての研究としても意味のあるものであったが、それ以上に、「地下の」歌の家が江戸中期になって確立してゆくさまの一端を追跡できたことは、本研究においても大きな収穫であった。京都香川家歴代の考察は、当初より自己の研究の大切なテーマでもあったから、今後は、やはり上方の地下歌人である第四代香川景柄(黄中)へも射程を延ばしたい。

さらに、新日吉神宮蘆庵文庫所蔵の全資料を目録化し、解題「蘆庵文庫について」をものした。併せて、小沢蘆庵や藤島宗順、さらには上田秋成、本居宣長らに関わる重要資料の翻印を併載した(日本書誌学大系『蘆庵文庫目録と資料』蘆庵文庫研究会(飯倉洋一・大谷俊太・加藤弓枝・神作研一・盛田帝子・山本和明)編、青堂堂書店、2009年10月)。そもそも社家藤島家は、非蔵人として朝廷にも出仕していたから、神社に伝襲したその大量の非蔵人文書も極めて重要なものだ。和歌史研究に直結したものとは言い難いかもしれないけれども、今後、体系的な翻印紹介が必要であり、それを俟って初めて社家の文事としての総合的な考察が可能になるのだと考えている。

以上、歌書刊行年表の編纂ならびに小沢蘆庵ほか主要歌人の研究は、従来非常に手薄だったこの期の上方地下和歌史研究に、ささやかだが確かなしるべを残し得たと受け止めている。とりわけ、梅井一室や石塚寂翁のような小さな歌人たちの事績を掘り起こして近世和歌史に定位させることは重要で、こうした細部の積み重ねが、のちの香川景樹登場の前史を照射することになるのだと考える次第である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

- ① 神作研一、「上方地下の系譜—梅井一室について—」、国語と国文学88巻5号、24-34頁、2011年、査読あり
- ② 神作研一、『聞書』—梅井一室述・記者未詳—、金城日本語日本文化87号、7-34頁、2011年、査読なし
- ③ 神作研一、「江戸の王朝美—歌仙絵入刊本の展開—」、人間文化研究機構 国文学研究資料館特別展示図録『江戸の歌仙絵』所収、131-145頁、2009年、査読なし
- ④ 神作研一、「香川宣阿加点点詠草(下)」、金城学院大学論集・人文科学編6巻1号、1-52頁、2009年、査読なし
- ⑤ 神作研一、「石塚寂翁の家集について」、上方文藝研究6号、58-69頁、2009年、査読なし
- ⑥ 神作研一、「元禄-享保期の熱田歌壇と香川宣阿」、東海近世18号、10-30頁、2009年、査読あり
- ⑦ 神作研一、『浄土宗長歌註』刊記、東海近世18号、1頁、2009年、査読なし
- ⑧ 神作研一、「香川宣阿加点点詠草(上)」、金城学院大学論集・人文科学編5巻2号、1-52頁、2009年、査読なし
- ⑨ 神作研一、「点者としての水田長隣」、日下幸男編『中世近世和歌文芸論集』所収、思文閣出版、274-294頁、2008年、査読なし
- ⑩ 神作研一、「水田長隣加点点詠草(下)」、金城学院大学論集・人文科学編4巻2号、

1 - 42頁、2008年、査読なし

- ⑪ 神作研一、「梅月堂門のゆくえ」、金城日本語日本文化84号、11 - 33頁、2008年、査読なし
- ⑫ 神作研一、「『続和歌極秘伝抄』刊記」、東海近世17号、1頁、2008年、査読なし
- ⑬ 神作研一、「水田長隣加點詠草（上）」、金城学院大学論集・人文科学編4巻1号、1 - 35頁、2007年、査読なし

〔学会発表〕（計3件）

- ① 神作研一、「歌書の刊・印・修一『百人一首像讀抄』の場合一」、国際浮世絵学会共催〈詩歌と絵入出板物〉、2010年9月26日、法政大学
- ② 神作研一、「江戸の古典学—『源氏物語伝来書』を起点として—」、上智大学国文学会夏季大会、2010年7月3日、上智大学
- ③ 神作研一、「歌書の変遷」、人間文化研究機構 国文学研究資料館第4回調査収集シンポジウム「王朝文学の流布と継承—国文学文献資料調査を起点として—」、2009年5月21日、人間文化研究機構 国文学研究資料館

〔図書〕（計1件）

- ① 蘆庵文庫研究会（飯倉洋一、大谷俊太、加藤弓枝、神作研一、盛田帝子、山本和明）編、青裳堂書店、日本書誌学大系『蘆庵文庫目録と資料』、2009年、802頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神作 研一 (KANSAKU KENICHI)
金城学院大学・文学部・教授
研究者番号：30267893

(2) 研究分担者 ナシ

研究者番号：

(3) 連携研究者 ナシ

研究者番号：